

職 場 文 芸 と と も に

三重県・カネボウ労組OB・藤 牧 初 彦

はじめに

六畳一間に四畳半の板の間、入口は土間というあばら家に私は育った。東端に便所があり裏口を挟んでお勝手場になっていた。炊事中の母に向かって、(進学を……)と一言、切り出した途端、母の表情が曇った。(父ちゃんがいれば…)と泣き出した。私にすれば母を泣かせてまで勉強がしたかったのではない。親友二人が進学組なので、友との別れが辛かっただけであった。

昭和三十一年、十四歳、同級生は三百人弱、進学が4、就職が4、家業が2割というように、進路が選ばれていた。母の負担を軽くしなければならない。その思いだけで、学校の廊下に張り出された求人票のなかから紡績工場を見つけ出した。1)新設工場であること、2)寮が完備していること、3)募集人員が男子七十名、女子七百名と大規模であること、母親が十年あまり紡績工場に勤めていたことも理由になった。

志望先を申し出ると、七十名は全国規模の話であり、安定所管内は二名、うち一名は鈴鹿工場のそばのH中学からの採用となっている。希望者は十二名、十一倍の競争率である、と知らされた。担任のK先生も<母子家庭でもあるし>とけん制する。母は一人で工場の窓口まで出かけると<人物本位なら文句は言いません、片親を理由にしないでください>と泣いて訴えた。私は<当たって砕けろ>と採用試験に臨んだ。合格通知を手にした時の喜びは忘れられない。

倉毛紡績鈴鹿工場は敷地面積十万坪、鈴鹿市に新設された羊毛紡績である。昭和二十五年に勃発した朝鮮戦争は、我が国の経済に大きな特需をもたらし、特に糸ヘン産業ではガチャ万景気の到来となったのである。会社はこの景気に乗って新工場建設を決定、旧海軍工廠跡地の鈴鹿市に立地したのである。春になっても事務所は仮事務所、食堂は工事中という工場に赴任した。寮に案内されたが、壁はまだ乾いていなかった。このようなツチ音が響く工場、私は社会人としての一步を踏み出した。

型どおりの養成教育が終わると、実戦投入である。倉毛紡績は伊丹工場という一社一工場という新々紡であったから、先輩は伊丹からの派遣であった。加えて機械搬入の据え付け業者が多数入っている職場で、右往左往しながら走り回った。職住一体の工場生活であった。

従業員の福利厚生のために鈴桜会という親睦会も立ち上がった。ソフトやバレーのスポーツ中心であったが、文芸部もあった。先輩の勧めに応じて書いた作文が、機関誌「道」に載った。

1. 「寮」

1. 巻頭に引用しているのは、中学校の女先生に出した手紙の返信からである。二年の担任であったW先生は私の提出する日記に、いつもコメントを入れてくれており忘れられないでいた。稚拙な文章であるが、平凡なタイトルには思いがこもっている。工場では寮のことを「だんき」と呼んでいた。男子寄宿舎の略称である。安い給料、酒に寄りかかる生活、ささいなことが小競り合いの対象となっていた。みんなで仲良く楽しい生活をおくりたい、そんな願いを寮と表現して夢見ていたのだ。(①昭和33年1月19日発行・鈴桜会機関誌「道」7号)

「全てが他人の前に展開される生活のむづかしさ、どんな事も自分で処理せねばならない。あらゆる事に苦労を重ねながら頼れるのは自分だけなんだという気持ちを深め、歯をくいし

ばって自分の人生を切り開いて行く」これ程、孤独で悲愴なものではないかもしれぬ。しかし、ささいな事ながらも先輩と意見の衝突が起きたり、何か矛盾を生じたりする時、寮生活のむずかしさを痛感する。

“先輩、同輩と共に団体生活を営む” 学校生活と共通する点も多い。でも学校生活はあくまで家での生活が主であったのに比べて、寮は職場に対してむしろ家庭なのであるから、「九十人の家族」なかなか複雑である。十人十様の性格の相違が日常生活でも、或る者はラジオを鳴らしてみたいとか、また或る者はぐっすり眠ってみたい、歌を唄いたいものもいるし、本を楽しみたい者もいる。

それぞれ自分の要求を満足させたいがために、一部の部屋においても中々まとまりにくい。沢山の者が生活している以上、ある程度融通性を持たねばならないだろう。仕事の疲れを心身ともに休ませる憩いの場、と誰かが寮について言ってくれたが、まさにそうだろう。みな楽しく面白く暮らしたいのが一番理想なんだから。

最早、入寮八ヶ月、楽しい憩いの場、こういう所が寮本来の姿じゃないかと……。いろいろ辛いこと、苦心すること、全て最後には「笑」に結びつくように努力を……。なんて思うこのごろ…。

2. わたをつむいで いとなすこと

2. 翌年書いた作品である。もともと本好きの図書室つ子であった。裏を返すと体操が全く不得手ということである。足が遅く水泳もできない。そういう私が「女工哀史」に出会った興奮を書いている。もちろん、未熟であるが、大正時代にこれだけの充実を成した先達がいた衝撃を語っている。以後なんども読み返すことになる。(②昭和 34 年 4 月 10 日発行鈴桜会機関誌「道」20 号)

ボクは満足しています。と共に自信があります。ボク等が新しい工場により新しい紡績の歴史を作っているんだという。だから僕は胸を張って話しかける。

紡績……ボクの小さい辞書には唯“綿をつむいで糸となすこと”としか説明されていません。しかしこれで充分です。紡ぎ、織るの簡単な方法を人間生活の欠くに欠かせぬ必需品として何十年、いや何百年繰り返しました。すべての企業歴史がそうであるように紡績もまた、家内工業的小規模なものより段々発展してきました。そしてその工場従業員として若い女子が大きな組織へ進出し始めた時、また悲劇も始まりました。大正、昭和初期の紡績女子、男子工員の実態は細井和喜蔵の「女工哀史」と題した文章の中で見出すことができます。

募集時の乱暴を、労働条件の無茶さを、懲罰罰金制度の残酷さを、外出制限の苛さを、工場食の不味さを、その切々たる文章の中からは半世紀前の姿を克明に浮かべることが出来ます。いかに非人道的な措置がとられていたかを……。

そして最後に彼は、

「人類が生きていく上に於いて、懐古主義者の言う如く、凡てを昔へ戻して裸体で居らぬ限り衣服は絶対欠くべからずものである。そうすれば“糸ひき、紡ぎ、織る、編む”の労働はどうしても否定することは出来ない。実に人生は生きるが為に死なねばならず、死ぬるがために生きねばならぬ。一大ジレンマである。けれど生きるものは万人であって死ぬるのは彼女達ばかりだ。万人が生きるが為には彼女を犠牲にせねばならぬという法は断じてあり得ない。生きるが為にはみんな死のう」と叫び、その解決策を次のように提案した。

「然らば、此の労働を一体どうしたらいいのか？ それには唯一つの道として“義務労働”があるのみだ。即ち、健康な一人前の人間にして“働かざるもの食うべからず、着るべからず”というモットーの許に各人が義務服役を為すのである。茲において現在の工場

組織は根本的な改革が施されて“工場国有”が実現するだろう。そうして時の政府は、此の衣服を作るための義務労働を一般結婚前の婦人に強制的するのだ。いま我が日本に於いて二千五百万の婦人が皆働く事となれば、決して子有りや病弱者に酷使を課する必要もなく、十時間、十二時間という怖ろしく長い時間を五年も十年も続けなくても済む。ほんの血気ざかりな婦人が一日に四・五時間、一ヶ年か二ヶ年働けばそれで必要な生産は出来る訳だ。」と……。

(昭和三十三年三月五日、第八刷 岩波文庫 大河内一男「あとがき」より引用)

それから三十年後の現在、ボクも現代紡績の一男子工員としての社会と結びつく事が出来た。

資本主義の異常発達と共に国営にはならなかった。無論、従業員は募集されて就労している。当時の東洋紡、鐘紡、大日本紡、日本毛織等の老舗はやはり現在も紡織界の主軸であることも、甲、乙班で機械を回すことも、一標準動作で作業が成り立っていることも三十年前とほとんど表面は変わるところをみない。

しかし、いたずらに歴史は繰り返されたのではなかった。これこそ当時苦しんだ人々の願いであり希望であっただろう。最も重要であり難問であった“哀史”のベールが民主主義の発展とともに取り除かれた。現在の状態から哀史は生れ得ない。適当の休養を、適度の勤務によって得、適度の報酬を極めて自然に得ることが出来る、なんて嬉しいことではないか。もし、後に残された望むべきもの、それは発展する明日が答えてくれるだろう。

3. 通信教育で学ぶ

3. 工場の機械が動き始めると、二交代操業の保全係を命ぜられた。女子台持係の応援や機械の注油、故障修理などである。ひとことで言えば単純繰り返しによる技能の習得である。中学時代の親友、Y君とは文通や訪問で連絡を取り合っていたのだが、進む道が変わってしまった。私には焦燥感がたまってくる。Y君の通う四日市高校の通信教育課程に入学を決意する。通信教育を受けている生徒のための機関誌に投稿したのが、この一文である。

新工場のスローガンは「製品品質で十大紡に追いつき追い越せ」であり、目標として掲げられたのが、品質管理のデミング賞獲得である。同賞獲得に向けて従業員教育のプログラムが始まっていた。念願のデミング賞を受賞したのは、昭和三十五年のことであった。

Q C、品質管理の基本は、おなじに見える製品には必ずバラツキがある。よい製品を市場に届けるためには、このバラツキをいかに適正に管理していくか、ということを問われていた。教育はその簡単な手法の獲得をさせるためである。この文章は、その社内教育の影響が顕著であり、苦笑させられるのである。

ところが国語、社会の選択で始まった通信教育は、古語文法で行き詰ってしまう。レポートが書けない、助けてくれる人は誰もいない。一年半で中退ということになる。(③ 昭和35年 「四高通信」7・8月号)

私は強い自分の意志を持つことが大切だと思います。誰からも信頼され、誰とでも協力しあう生活を望むには、先ず自分の中に於ける完成を要求されるからです。アイ・ジョージや森繁久彌（サラリーマン笑劇を除く）の歌が沢山の人の心をとらえるのも、彼らの意志、心が歌の中にあるからだと思います。私の会社には毎年、沢山の大学生が入社されますが、彼らのほとんどが学問という裏付けを除いてもそれぞれ強い意志をもち、その主張は誰にも受け入れられる立派なものです。

誰からも認められる意志、主張を持った人とはどういう事でしょうか？

これは簡単に言うと、基礎のしっかりした人、と言えると思います。大卒の方は十六年という勉学の基礎をもっています。中学の私たちは九年の義務教育です。ここでバラツキを無

視して数値的な点だけを考えると、双方が同じ高さの三角形です。底辺が 16 cm の三角形がうんと安定した感じなのに比べ、6 cm の三角形は何となくひよわな感じを抱かせます。ここに学歴の相違が現れると思います。言葉を換えれば、学歴の必要性、いや、勉強により基礎を伸ばす必要性があるわけです。

もちろん、これは一つの考え方であり実際には沢山のバラツキを持っています。前記のアイ・ジョージや松下電器会長・松下幸之助等の底辺は決して広くはありません。しかし、彼らはひよわくはありません。林芙美子もまた然りです。それとは逆に大学生であっても強盗になるのも見受けられます。こういった極く少ない両極端から沢山の人々がバラツキの中にある訳です。そして基礎の広いものほど、たくましい意志を持ち、物事を的確に判断し、自分の主義を捜す力も又、広くなるのです。これは確実に言えます。私たちは勉強をせねばなりません。

× × ×

しかし、通教の中での勉強、難しいですね。私の会社でも二十人ほど同じ寄宿舎に住み、定時制へ通っています。彼らは社内、自治会の行事に優先して勉強に励んでいます。ところが、私たちの交代勤務労働は、どうしても社内、自治会行事を優先させ、通教はうまく進みません。原因はどこにあるのでしょうか。

自治会とか、組合とかには身近さがあります。職務上のことならなおさらです。ところが、私のストップした国語古典のように、通教には個人を単位とした難しさ、進みにくさがあります。これを破れないのですね。巡回指導やスクーリングには出席出来ずとも時間は作れます。そうとすれば、“何でも喰ってみせるぞ”、そういった精神的なものに欠ける点があるようです。

私の所のように新しい会社でも終身雇用、年功序列型賃金に批判がチラホラ聞かれたした昨今、今こそ勉学が必要なのではないでしょうか。

4. 鈴鹿支部結成大会

4. 昭和三十八年十月、鐘紡への吸収合併が決まった。私は支部執行委員の一員となり、情報宣伝部を担当、発足大会の記事を書いて組合本部に送った。

鐘紡労働組合鈴鹿支部結成大会が三月七日、四日市市民ホールで開かれた。結成大会は、鈴鹿紡績労働組合解散大会のあと引き続いて行われた。本部から小林組合長以下三役、四日市をはじめ地協七支部長、会社本部から山田労政課長、四日市、松阪両工場長、鈴鹿工場幹部の来賓を迎えて午前 10 時開会した。

まず、鐘紡労働組合鈴鹿支部結成に関する件が満場一致で確認されたあと、新任役員が紹介され、森本支部長は「鐘紡諸先輩に学びながら、全員で力を合わせて新支部を発展させよう」と力強く挨拶した。

その後、小林組合長、伊藤人事部長代理、山田労政課長からそれぞれお祝いの言葉があり、続いて全織関係、各支部からの祝電披露のあと、支部規約承認に関する件を原案通り承認した。(以下略・④昭和 39 年 3 月 10 日、鐘紡労働組合機関紙(労鐘)第 412 号)

注：文中にある伊藤人事本部長代理は、社長となり長期にわたって経営を担当することになる伊藤淳二氏である

5. パトリシア

5. 二十六歳になって世帯を持った。この文章はまったく記憶にない。今回、偶然に古い荷物を広げていて見つけて飛び上がった。職場結婚である連れ添いも、知らなかったという。稚拙な作品を書きまくっていたから、そのうちの一つであろう。結婚で舞い上がっていた例になるかもしれない。

(⑤ 昭和44年3月10日、支部機関紙「はぐるま」4月号)

世の中にあんなに美しい人がいるんだろうかと、ぼくが魂全体にショックを受けたのは十六歳の時です。相手が女性であったこともあり、ぼくの驚きはとても大きいものでした。パトリシア……ゴダールの作った最初の映画「勝手にしやがれ」に登場する女優ジーン・セバーグの演ずる副主人公がその人です。知的で冷たく、男の子などに興味がなくてマイホーム的でなくて、それでいて人間らしいという、それはもう、ぼくをすっかり虜にしていまいしました。この映画を四回ほど見て、その美しさは、ますますぼくの心の奥深くまで響いてくるのです。

それ以来というものの、パトリシアはいつもぼくの心の中に居りました。汚れたシャツをベチャベチャにしながら、BWの乾燥機の巻付を修理する時に、カード機の台下にもぐりこんで、鼻の穴を真っ黒にし、無精ヒゲにバーがいっぱいついている時に、ぼくはパトリシアを思いました。肩がガクンと落ちるような美への感動をぼくに与えたパトリシア、願わくば、ぼくをみた誰かが、それはたった一人、たった一分間でもよい同じ感動を他に与える力をぼくが持てるだろうか、などと考えたものです。汚い靴、うすっぺらな教養、旅を愛する、美しい汗、繊維労働者、すばらしい友人、いろんな自分に対するイメージをいつもパトリシアに対比させていました。

「変わっているな、二十歳になっても、ガールフレンドの一人もいないなんていうのは」「ちっとも変ってやせん。よい人がおったら、すぐ恋をするし、いなかったらしない。結婚したいと思ったら、明日でもするし、いなかったら三十五でもせん」

「ちょっと変わっているな」「やらなければいけないことが多すぎるんだ。自治会、組合、クラブ、仕事、女の子は多くても、ガールフレンドなんか出来ん。それにどっちかというのと、つまらん男寄生が、沢山いる女寄生の中で、いいのを見つけてデモンストレーションするのは、性に合わん」「まあええわな、男は二十八くらいがちょうどええから、まだ早い。それまでに貯金しといたらええわな」「二十八だからええということはない。二十でもええかもしれないし、四十でもええかも知れん。お金など、あってもなくても、結婚とは関係あらへん。なんでも平均を選ぼうとするのは、大人の事なかれ主義で、ずるい、ずるい」「まあ、ええがな」

父に結婚五年目で先立たれて、苦労の固まりのような人生を送ってきたオフクロとの会話にも、裏にはパトリシアがありましたが、それを説明するのは、理解してもらおうとする方が無理と思っていました。

ところがある時、ひよんなきっかけで、山下清子を知りました。山下君は、もと会社にいた子で、その時は辞めて定時制に通っていました。パトリシアとはイメージがまるっきり違っていました。ぼくは魅せられてしまいました。いわゆる初恋という奴です。ふしぎなもので、山下君が現れるとパトリシアはパトリシア、山下君は山下君と分けて考えるようになるのです。ぼくは結婚を申し込みました。しばらくして、ご両親に面会しました。ところが答えは否だったのです。①若いということ、②兄弟が二人しかいないから近くに嫁がせたいこと。ぼくは一人しょんぼり帰りながら山下君が、うちを飛び出して来てくれることを確信していました。二つとも理由にならへんからです。ところが、あとで山下君は「父に従いま

す」という意向をぼくに伝えたのです。ぼくは、とつぷり暮れた鈴鹿の町を自転車でぐるぐる回りました。涙が無性に出てきました。

①給料が安いということ、②中卒ということ、③資産のないこと、山下君のお父さんが聞いたくだらない質問が、僕の頭の中をぐるぐると自転車と同じように回るのです。だけど、ぼくが億万長者になる訳にもいかないし、社会の貧困を一举になくす訳にもいかない。山下君は自然に離れていきました。一年もたつと、街で出逢った見知らぬ人が残していった空気のようなものになっていました。

山下君が消えると、ふしぎなことにパトリシアも消えてしまいました。だけどパトリシアがぼくに与えて美しいものを知った時の感動は、別の形でぼくを食欲にさせたといえます。自分も含めて、自分を取り巻く人々が、生活をかけて飛び回っていることに興味を覚えるようになりました。もちろん、求めるものは美しい人、美しい生き方です。林尹夫という学徒動員された特攻隊員の手記を読んで、涙をポロポロ流したのはつい最近のことです。

そんなある日、強烈なテレパシーがぼくを包みました。相手は同じ職場のカズコクン。彼女は5年間同じ職場にいる女性。以前に課長が「口説きなさい」と言ったことがあって、「まっぴらごめん」と言ったことがあるので、ちょっと困りましたが、テレパシーはますます強くなる。そうしてとうとう承諾をしました。「結婚します。すぐします。反対してもダメだよ」飛び上がるように、ぼくは、オフクロに伝えました。

6. 職場で考えること

6. 職場を報告している。鐘紡が企業再生機構により、繊維からの撤退を選択、多くの企業が中国へと移ったいま、文字通り過去を語り継ぐ職場の風景、である。

(©昭和45年2月20日 支部機関誌「はぐるま」5号)

ひかえめな態度、一生懸命やろうという心意気、そんな新入生独特の真剣さがそばにいる私にもピリピリ伝わってくる。年々上昇する初任給、はげしくなる求人難、高卒者の採用等々、台持係の変化は時代を感じさせるが、この新入生独特のムードはちっとも変わらない。だから、十三年もこの職場にいる私は、新入生が好きである。

だが、このムードは二年生になるころ、急旋回する。ほとんどの女子が類型的な変化をみせる。それはこんなふうにある。新入生のときにある姿勢が「みんなに好かれよう」「みんなと仲良くしよう」「みんなに負けないよう仕事をやらなくちゃ」であるものが、一年も過ぎると「みんなに好かれるなんて無理なんだね」「親しい友とだけ仲良くしよう」「仕事は自分の義務を果たす程度に」というように彼女たち自身が順応するのである。

これは成長と言えるであろうか。しかし彼女たちも二年、三年と退社する友を見送り、勤続五年にもなると台持係から離れて、台持長に任命される。このころの彼女達には、はっきり成長が窺える。それは若年退社の淘汰を乗り越えてきた自信なのか、持たされる責任に対する頑張りなのか、あるいはそういう年齢なのか、はっきりしないが、世話役としての能力を職場で、寮で発揮し始める。つけ加えるならば、彼女たちの自信を支えるのに台持を離れるということがある。単調、多忙な糸継ぎ、台掃除から解放される喜びと、高い給料（それはもちろん台持係に比較してということであるが）が彼女たちの自信を支える。

だが、私が述べたいのは、この新入生と役付女子を除くグループである。私たちの職場を支えるものが、まさしくこの集団に属するからである。一人の若き少女が、新入生—一般台持—台持長—退社というコースをたどるとするならば、一番長い期間が一般台持であり、職場の大多数をしめるものが彼女たちだからである。

光子、彼女は中卒の4年生である。彼女はパッチリとした瞳をもつ美人で勝気、「すみません」とか「お願いします」が無い。「部品がこわれたよ」「巻付きました」それだけである。おまけに機台の調子が悪いと、部品や掃除器具をおくかわりに放り出す。投げ出す。鼻筋の通った美しい子であるが、ちっとも女性らしくない。へんに注意すれば、反抗するだろうから、少しずつ何かを言っていこう。時のたつのを待ってやろうと私は考えている。

裕子、彼女は勤務中に大きな欠伸（あくび）をするのを特徴とする。手を持っていかず、扁桃腺が見えるかのごとき大きなヤツである。先日は隣の自動車会社の男性の単車から転げ落ちて怪我をした。だが、彼女は人当たりが良い。「牧さん、昨日ね、「新夕日のガンマン」見たよ。パンパン、スッテキやったわ」などと言う。「あくびばかりしてんなよ」と言う。「なあに言ってるの、牧さんもよくやるくせにワッハハ」とくる。平凡な奥さんになればよいがと思う。私は平凡などというものは嫌いであるが、裕子には平凡が望ましく思えて仕方がない。

美津子、彼女はおとなしくて仕事熱心、それに愛らしい顔、長い髪、無口でひたすら仕事をやっている。清潔好きで彼女の機台の周囲はいつも美しい。無口で無表情だから、ちょっと何を考えているのか、理解しにくいくらい。結婚する相手も決まっているという。

チヨミ、十八歳、彼女は不満屋である。ボロボロのズボンを平気ではいてくるし、帽子が破れたといって新聞のチラシを破いて、糊ではって出勤してくる。何かを言うと「人のことや、放つといて」と反抗する。それは女子に対しても、なんら、変わるところがないから、みんなはハレモノにさわるようにしている。だが、仕事はムキになってやるので、みんな黙っている。

いろいろな子がいる。みんな汗を流している。機械音も高いので大声でどなりあって仕事をする。全織の調査によれば、繊維労働者の半数以上が「いますぐやめたい」「やめたいけれど行くところがない」と思っているという。どうしたら改善が可能なのか。私たちの職場から不平や不満を無くすには？ 自信を持って仕事に取り組むには？ 自分の子弟、友人を是非私たちの職場に来させたいと思うには？ いろいろな問題提起がされている。汗にまみれる仕事、工員であること、集団寮制度、男女比のアンバランス、対社会の意識、低賃金、そうしていろいろな対策が講じられている。そういった流れの中で、私はいろいろなことが思い浮かぶのである。

最近、社内教育制度としての「一般教育」が充実している。以前から繊維産業は未婚女子を主体とする背景をもち、「花嫁修業」としての「常識教育、一般教養」を従業員に行っているのは長い歴史を持っている。これが昨今の求人難により、ますます労務管理を含めて多様化している。

私の工場でも、全新生に中卒は、NHK高校入学の資格と機会が与えられるし、すでに隣の私立短大では紡績のための2交代授業を開講している。こうして私たちの職場から少数の高卒、短大卒がすでに誕生しているし、これからも続くに違いない。だが、そこには必ず希望しないもの、落伍していくものがある。確かに補習授業の設備と講師を会社は与えてくれるし、働きながら学べる喜びは、私たちの時代から比べると数段大きく開かれている。だが落伍した女子たちが「私は能力がない、ダメ人間だ」という体験とともに落伍していくとしたら……私はたまらなくなるのだ。少なくとも、彼女たちも仕事は全うしたに違いないからだ。仕事と勉強、両立させた人たちの労力と功績をたたえよう。だが仕事だけを一生懸命やった人も、決して劣っているわけではない、という考え方をみんなが許すかどうか不安なのだ。

私の職場の新入生は、山部いつ子と北由紀江の二人である。二人とも汗にまみれて必死で

機械と取り組んでいる。入社1カ月、今がいちばん大変なのだ。養成教育も終わり番付（交替番で台持となる）に入ったばかりで、仕事はコツを得るまで、一日中、走り回ることになるからである。

北由紀江は高校時代、剣道をやっていたというだけあって、ダイナミックに仕事を進める。習熟度も高いようだ。先日は「仕事は面白いが、寮の程度の低さはイヤです」と課長に申し立てたという。養成係の先輩にも、バリバリかみついている。要するに活動する新入生といえる。

これに反して、山部いつ子はおとなしい。黙々と仕事をしている。しかし彼女の動作は遅い。昨日も製品が彼女の台で滞って応援の女子をつけたほどだ。彼女はそれを気にして、泣き出さんばかりの顔で作業している。養成係に聞くと、一度教えたことも、どうも守れないらしい。それも意識的ではなく、他のことに気をとられて守れなくなるらしい。即ち、コツを習得するのが遅く、ポイントがつかめないらしい。それだけに彼女は、ボコだらけになって一生懸命である。その熱意は北由紀江をはるかに超すものと思われる、がいかんせん北由紀江の方が能率的に優れているのは事実だ。

「人は良いのだけれど技術がねえ」という大工よりも、「大酒のみだけど仕事は立派」という大工が望まれるのが仕事である以上、北由紀江の方に軍配が上がる。まだ、1ヶ月だが、たぶん、山部いつ子は北由紀江を追い抜くことは出来ないだろう。然し、私は「ああ、私ってダメなのかしら」とは思わせたくない。彼女の鼻の汗を見ながら、むしろにそう感じるのだ。今は新入部屋だからよいが、光子や裕子、それにチョミなどと同じ生活単位になった時、北由紀江ならたくましく生き抜くだろうが、彼女はどうか自分を変えるのだろうか、などとまで考える。

みんなが意義多い青春を求めている。そうして、その中で職場、仕事が大きな部分を占めていることに気付いている。仕事の社会的地位、自分の能力、創造性が自分の仕事の中に活かされること、社会的水準の労働条件、それらを青春期の若者が求める。だが、現実には、あくなき能率向上と厳しい競争が待ち受ける。「よほど頑張らないと貴方なんか、社会の落伍者になりますよ」「社会は貴方の考えるように甘いもんじゃありませんよ」彼女たちはそういう現実には振り回される。そうして三、四年生となるころ、仕事は生き甲斐の対象から外れて、多くの場合、腰掛的なものに変化する。決してサボらないが、眼は自分だけに向けられて保身第一となってしまふ。仲間意識が薄れて、ちっぽけな理由から勝利者や敗北者が生まれる。ああ、わびしいことではないか。

ボーイ、ウェイトレス、デパートの店員などのサービス業種に人気があり、その頂点にテレビタレント、流行歌手がいるような現代は、どこか間違っていないだろうか。一般に手の汚れない仕事が、よい仕事と思われ、油とボコの中で働く彼女たちは、競争の中で落伍者が作られ、若年退社の傾向はますます強くなって行く。

日本は国民総生産世界第二位という輝かしい地位を獲得した。私の会社は、日本有数の企業を目指し、成長を続けようとしている。

彼女たちの努力が、地味ではあるが、会社の、ひいては日本の繁栄を存立させている礎なのだ。資本主義社会の繁栄と高度成長は経営者の努力とともに、彼女たちが生み出しているのだ。

今日も仕事を終えたあと、寸分の余暇も、勉学に打ち込む。そういう彼女たちの心の中が、何かの充実感、何かの誇りをもつことを得ず、すきまっ風を感じていたら、あまりにも矛盾をした仕組みではないだろうか。それがまた私自身への問題提起となる。

今日もまた、山部いつ子は黙って走り回っているに違いない。私も黙って見つめる。

7. オオ！ エルビス

7. 私の青春記である。思い出を語る、と言うよく使われる手法である。下手な創作も読み難いが、安易な綴方も読者の共感を得るのが難しい、と言える。(⑦昭和45年2月20日 支部機関誌「はぐるま」6号

眼に入るものすべてに黄色のフィルターがかけられたようだ。肩から力がスーと抜けて両手の感覚は溶けるように麻痺する。指先に軽いしびれがやってきて、お腹のあたりからジーンと熱いものがこみ上げてくる。足は宙に浮いている感じで、足の裏でうごめく異物感汗である。プレスリーの歓声が聞こえて来るたびに、中学二年生であるぼくには、そういう症状がやってきた。昭和三十一年、エルビス・プレスリーが、ロックンロールをさげて登場したからである。

白黒テレビは十四時で十七万円もし、人気番組といえば力道山のプロレス番組くらいしかなく、民放が始まったばかりで、ぼくの家にも四球のスーパーラジオしかなかった。つまみを回すと「ピーピー、フィーン、ヒョロヒョロ、ブーン」という発信音が入った。そんなラジオにしがみつくようにプレスリーを聞いた。日本のポピュラー歌手は山下敬二郎、平尾昌章いまだ出ず、チェミ、いずみと小坂一也ぐらいであった。ときどき小坂一也が「ハートブレイクホテル」を歌ってくれるので、下手くそなのを我慢して聞いた。ラジオ番組に「丹下キヨ子の司会で「キスミー素人ジャズのど自慢」というのもあった。これを聞くと「アイニードユアラブトナイト」や「キングクレオール」を聞くことができた。もちろん、素人であったがプレスリーナンバー聞きたいばかりに、出来るだけ聞いた。この番組からフランク永井や水原弘が育ったという。NHKの午後4時からの「午後のメロディー」でも時々、プレスリーをかけてくれた。ぼくはそれがどんなに待ち遠しかったことか。

学校には良い友人たちがいた。上田君と勝ちちゃんである。上田君は湯の山温泉の一、二を争うホテルの一人息子であり、勝ちちゃんは柔道部ベストスリーの一角をしめるファイターであった。この二人からいろいろな情報を得た。上田君は山を歩くことが好きであり、勝ちちゃんは「ニヒル、孤独」などという人生論のできる中学生であった。上田君とぼくがE組で勝ちちゃんはF組であった。机の並び方は、グループ勉強で、机を四つ囲み、八人一組の班を六組作っていた。ぼくと上田君は授業中、漫画交換や文章交換をやった。特に社会の大川サンの授業は完全に無視した。大川先生の授業たるや、教科書を読み流すだけのくだらなさであった。たった一つ、農業には詳しい先生で「百姓ちゅうもんはな、糞または尿の中に手を突っ込んでだな、グルッとかき回して、その濃さが調べられるようにならなきゃいかん」などという話は面白いが、他はさっぱりであった。

〈昨日、今週のチェーンヒットで、タイガーマンという曲を聞いたぜ〉〈ぼくもモチロン〉〈プレスリーリサイタルでストッキングが投げられたそう〉〈へえー、それは知らない〉〈じゃ休憩に〉などという文章をルーズリーフを外して交換するのである。休憩時間になると上田君にその最新情報を聞く。〈プレスリーのリサイタルではハンカチやストッキングが飛ぶらしい。女の子は単純だから興奮するんだ〉靴下をストッキングなどというところが上田君らしい。〈ハンカチはわかるけど、ストッキングというのはポケットに持っているのかな〉〈アメリカだから、わからないがサッと外すのじゃないか〉〈サッとねえ〉などという話になるのである。

学校の帰りは、書店によってプレスリーの写真を探した。土曜日は放課後、音楽の先生主催で「土曜コンサート」が開かれる。上田君や勝ちちゃんとよく押しかけた。五分くらい、先生の説明のあとかかる曲は「新世界」や「未完成」「くるみ割り人形」などであって、ほとん

ど居眠りをしてしまうのであった。それでも学校の四万円の電蓄がめずらしく、ステレオのないところで、あまり良い音が出るので必ず参加した。〈あの電蓄でプレスリーをかけたいな〉そうぼくは思った。「ハウンド・ドック」なら百回でも聞けるかと思い、先生に言ったことがある。〈くだらない。プレスリーなんかが聞きたいのは勉強不足だな。あんなのは音楽ではありません〉先生にピシャリとやられて、断絶を感じた。〈ぼくが、なんというか、こんなに良いと感じるのだから、プレスリーがすばらしいことは、優れた音楽であることは、すくなくともぼくにとっては間違いない〉と先生に言ってみた。〈ぼくが感じるから、などと言う表現が勉強不足です〉先生が再び否定した。

だが、上田君は〈良いものは良いさ〉と賛成をしてくれた。それでも彼は「運命」や「チゴイネル・ワイゼン」「民謡」などのレコードを持ちながら、プレスリーは一枚もなかったらしい。従って、彼はプレスリーに興味はあっても、ぼくのようにいかれてはいなかったと記憶する。

上田君が新しく登場した石原慎太郎の「太陽の季節」を教えると勝ちちゃんがリカルトサントスの日本民謡を教えるというように、ぼくらが「雑学」と称した世の中のことに、無性に興味があった年頃であった。谷崎潤一郎が中央公論に「鍵」を連載し始めて、話題を呼んでいた。これは是非と、本屋で見ればよいものを、英語の先生の机の「鍵」を読んでいて、頭を教科書でガンとやられたのはぼくである。上田君は修学旅行で歌謡曲を歌った女生徒をホームルームで断固批判したり、家のホテルに大ダンスホールが完成した時、父である社長に「大ダンスホール完成」の看板を下げさせたり、という自分たちの憲法は持ち合わせていた。ぼくの家が伊勢湾台風で潰れたとき上田君は車でなく自転車で田圃に足を突っ込みながら、訪問してくれた。彼は早稲田を出て、スイス、ハワイでホテル修行のあと、現在、経営に参加している。

勝ちゃんは、家で農業をやっている。先生は結婚して、ぼくが北海道旅行のとき、アドバイスを依頼したら、「ハッチャンは良いところもあるが、なんとか他人を利用してやろうというその態度は私は嫌いです。従ってアドバイスは出来ません。返無用」と怒られ、その後七年間音信不通。

会社へ入ったのは昭和三十二年。初任給四千六百七十円、手取り二千八百円であった。「今月は給料全部飲んできたぞ」と大言壮語する先輩がいた。「テメー、バカヤロウ」飲むとすぐケンカを始める先輩がいた。ぼくは娯楽室のラジオで、プレスリーを聞いていた。給料を少しオフクロにも送ってやりながら、小遣いを少しずつ貯めた。

五千七百円を投資してラジオを購入したときは嬉しかった。六畳に三人、八畳に四人、そのころは男寄も詰め込み主義である。ぼくは後番を終えて帰るとイヤホーンを耳にして、プレスリーを聞いた。「アーユーロンサムトナイト」「冷たい女」「ラブミーテンダー」エルビスは次から次へとヒットを飛ばした。エルビスの歌のほとんどはラブソングである。

「ぼくは君を離さない、たとえ太陽が消えようとも」とか「やさしく愛して、君を抱きしめ、幸福いっぱい」とかいうたぐいのものであろう。しかし、ぼくにとってプレスリーは耳で聞くものではなかった、頭で理解するものでなかった、ただ肌で聞いていた。お腹で聞いていた。下積みの仕事は辛かったけど、寮へ帰って布団にもぐりこみ、イヤホーンを二つつけてプレスリーを聞いていると、みんな無くなっていくのであった。

三年間坊主頭でいた。上田君は四日市高校に在学中であった。彼とは一年に百通ぐらいの手紙交換をしていて、年に何度か話し合いをしていた。彼が坊主頭でいるのに自分だけ大人の真似は出来なかった。〈もう髪はのばせ〉という先輩に〈ユール・ブリンナーが好きだから〉とごまかした。

まもなくお金ができたのでラジオをつなぐプレーヤーを購入した。もちろん、はじめて買ったのはエルビスのLPであった。自分でも歌って、演芸大会などで披露した。だけどこれは聞くようにはいかず、大きな声で怒鳴るものだから、みんなびっくりして不快感を催すようであった。だから、これは宴席に限ることにした。まもなく、プレスリーは徴兵に応じて二年間の空白があった。そのころに、ジャズが飛び込んできた。ジャズは迫害されてきた黒人音楽である。ジャングルの平和が破られて捕えられた黒人が、はるばる海を越えアメリカで売買される。厳しい労働と差別の中で、ニグロは淋しく故郷を思い、歌らしきもの、音らしきものを探す、それがジャズのあけぼのとされている。千九百年ごろ、ニューオルリンズで誕生したジャズが、シカゴで白人の社会と交わりながら、デキシーランドジャズの花開く。更に発展して千九百三十五年ころには・・・などという研究を野依君や後から入社した菊田君と熱っぽくやった。南里文雄、園田憲一、ジョージ川口、鈴木章治、東京キューバンなどの演奏会を名古屋、四日市へ出かけて聞いた。大衆の音楽、宮廷の音楽、商業主義の音楽、プレスリーがぼくの心の中で揺れ始めていた。

MJQ（モダンジャズクアルテット）が来日したとき、ぼくは勇んで名古屋へ出かけた。二千円の入場料は決して安くなかった。だが、ジャズを早く自分の手の中で感じてみたい気持ちは金額ではない。満員の名古屋市公会堂で演奏は続いた。

「ジャンゴ」「ピラミッド」「ピエロ」美しい音である、洗練された音である。だが、MJQの中に、働くものの心は感じられない。即ち、彼らはアーティストであった。ジャズが、奴隷のニグロの魂をMJQが引き継いでいるとしても、もはや彼らにはモダンジャズの音楽性を追求するという、芸術家の作業しか残されていない。そう思えた。芸術が芸術性を高める過程で大衆と遊離する現象がジャズの中にもあった。プレスリーの低俗さがやりきれないという、やかましいのはたえられなという。しかし、現実プレスリーは、ぼくの仕事、生活を支えているのである。ぼくはプレスリーを再認識した。

それから、いくばくかの歳月が流れている。もう熱っぽいものがこみあげてくることはない。今年の正月三日、アメリカで爆発的視聴率を上げたという「エルビスプレスリーショー」が放映された。ぼくは静かな感激をもって観た。いま、ラスヴェガスのインターナショナル・ホテルで開かれたワンマンショーの実況録音のLPが出るのを心待ちにしている。

8. 働くことと書くこと

8. 小川隆太郎先生には三十年の長きにわたって指導を受けた。「鐘労」の文芸教室は先生の熱意あればこそ、の指導であつた。私にとっては書きなぐっていた作品を、きちんとした目で読んで頂く機会を得ることになった。本当にうれしかった。リタイアーズ十年、いま私は「土曜会」という文学研究会に顔をだしているが、こちらは清水信先生、九十歳である。両先生との出会いによって、教えられることはあまりに多い。心から感謝している。(⑧昭和46年10月20日 支部機関誌「はぐるま」9号)

今年も「生活の中から」が出た。緑の表紙といい、大阪支部書記長・奥正男さんの挿絵といい、立派な本だ。配布部数が少ないので支部員の眼にふれる機会が少ないといえる。(もちろん、組合に行けばいつでも見れるし、一部は「鐘労」にも載るのだが)PRを兼ねて紹介したいと思う。

労組の本部（大阪）教宣部では、文化活動の一環として文芸教室を開いている。文芸を愛好する組合員のための教室だ。指導は作家の小川隆太郎先生で、鈴鹿にも一度見えたことがあり、温かく優しい方だ。この文芸教室が十五年もの長い歴史を持ち続けているのは、ほとんどこの先生の情熱によるものだと、ぼくは思う。

毎月一回、指導添削を行い（これは支部の組合がくわしいことを教えてくれるが、鈴鹿に

は文芸サークルがあるので入るとよい。会費は無料だ）秋の文化作品コンクールで成果を競うのだ。このコンクールの入賞作品が「生活の中から」という文集である。

作品の種類は何でもよいわけだが、水準が高くて、参加者の多いものは詩、俳句、生活綴方だ。今年作品の中から、二、三を紹介したいと思う。

まず、鈴鹿の「芽生え」と題された**木下博代**の文章である。小川先生は評する。

木下博代は志摩の娘である。鈴鹿工場で働いていて、休みには島へ帰る。鳥羽から船に乗って帰るのである。「船に乗り込んだら、たちまち島のおばさんたちの好奇心な目に見つめられ、身のすくむ思い」になるのである。両親は海でノリをつくっている。お母さんは船べりで胸を打って寝ているのである。お父さんは「お博さんが帰ってくると家の中が明るくなってええわ」と無邪気に喜ぶ。「自分を必要としてくれる人があるっていいもんやなあ」と、お博さんは思う。ここが大変いい。

お博さんを必要とする人物がもう一人いる。ちっとも手紙をよこさない「あいつ」である。「そんなとき、あんな奴と思いながらゴシゴシ洗濯するといくらか気分もスカッとする。」

そういうあいつのことがいつも気になる。あいつとは「世の恋人同志とは、まったくかけ離れた仲だ。デートするでなし、話をするでなし、他人のようにそっけない。」それが木下博代の青春の「あいつ」なのである。このへんもきわめて具体的だ。父は「あいつ」のことは知っているらしく「結婚は島の人としてくれ」という。それを聞くと「だれがこんな因習深い島になんか残るもんか。海女で取る貝が少なければ肩身のせまい思いをせんならんし、噂はすぐ尾ひれをつけて飛び回る。私は「まっぴらごめん」と思ってきた博代だったが、だんだん年老いていく両親をみるにつけ「なんだかちょっと考えが変わりつつあるころ」である。その心の中には、幾分は「あいつ」が大きな場所を占めていそうである。お博さんの心の動きがよく分かるのである。

次は、住道の**宮園道子**である。「私の青春」と題された文章を、小川先生は評する。

管糸がにぎれなく必至だった新入者時代から、宮園道子は「私、この会社、この寮がとても好きなんです。」と無意識に口に出るまでに、この生活となれ親しんできた八年間。「私の一番大事な時期を寮で過ごした。我が家ではなくこの寮で少女から娘に成長した八年間」を、宮園道子はしみじみ回顧する。

この八年間で宮園道子が得たものは、職場の技術だけではない。もっと貴重なものである。「この寮で協力、チームワークの大事さを知り、人間の絆の尊さを悟り、また、相手の身になって考えることを覚えた。そして、この寮で愛されることの幸せ、愛することの喜びを知ったのである」。これは一年や二年の寮生活ではとても得られない優れた体験である。「よそのオフィスガールよりは人生経験も少ない」どころか、オフィスガールなどではとても得られないものを得たのである。

宮園道子は、もういつこの会社をやめても、社会の歩みにおくれることはない。「家庭に入っても、どんな苦難にも耐えていくだろう」、と私は信じている。「化粧もせず、体中にボコをつけ、ふしの大きくなった手とともに」生きた青春は宮園道子に強靱な人間性を育てている。

しかし、私としては宮園道子が、来年もまた、すなおな澄んだ眼をもって書き綴った文章を見せてくれることを期待しているのである。

同じく住道・**吉永鈴子**の作品である「ゴウイング・マイ・ウェイ」を小川先生は次のように評する。

吉永鈴子は看護婦になりたいという念願を断ち切って、姉の吉永時枝の働いている住道工場へきたのである。父母は姉のいる職場なら安心できると思って鈴子をお阪へ出したのであった。〈すうちゃん、涼ちゃんから手紙よ、読んどいて〉というのが、日本一よい時枝さんである。この時枝さんに守られて、鈴子はハツラツとして糸継ぎに精を出しているのだ。涼ちゃんからの手紙は〈姉さん、これ戴帽式の記念品です。私ももう看護婦です〉という内容である。それを見ると鈴子の気持ちは動揺する。自分もどんなに看護婦になりたかったか、〈私はいつの間にか唇をかみしめてしまった。右手に握られた写真はそのとき、クシャクシャにされてしまったのである〉。それほど鈴子は逆上したのである。そして〈とうちゃん、姉さんと一緒のところへ行かせてもらいます〉といった三年前のことを思い出すのである。

いま、鈴子は「仕事の忙しさに看護婦ということばを忘れかけていた」ところである。「憧れの看護婦へ近づく妹の過程」を現実に見たのだから、昂奮するのをもっともである。そのとき「ピッ」と「組長の笛」が鳴る。「みるとスライバーが切れて台が止まっている」。

鈴子はたちまちわれにかえり、台に向かって突進するのである。この状況がまるで目にみえるように書けている。そして〈ああ、やっぱり私の道はこれなのだ〉と実感する。鈴子はいま、NHK学園三年生。働きながら学ぶ青春の毎日を充実して生きようとしている。「そのとき何かしら自分の道にどっしりとした重みを感じた」という言葉が、この作品の中でも、重みをもっている。もう涼子を羨（うらや）み憎む気持ちは、彼女のどこにもない。心から妹におめでとうといえる自分を取り戻したのである。

このように働く仲間と小川隆太郎先生が、「書く」という作業を通じて、文芸教室で心を通わせるのである。ぼくも文芸教室に入って五年、小川先生にひっぱたかれながら（もちろん文章である）しがみついている。なかなか、いい文章ができないだけに先生の批評も厳しい。以下のようなのである。

「痛快な文章であるが、この文体は少し古くさいのではないか。二十四歳の藤牧初彦の文章とはちょっと思えないほどである。文章は達者に書くがオリジナリティが弱い。独創的な思想が無いからだともいえる。自らの思考形成に苦勞する必要がある

「どうも作者は、安易に、自分の好みで作品を作り上げる傾向がある。人物がすべて手製になり、生きた人間が感じられない。」

「それはそうと、今月の作品は一人だけというのはどういうことであるか。みんな暑さにばてているのだとは思いますが、此の頃の季節になると、そんなに疲れてしまうのか。それとも、ほかに気をとられるような行事が多いのか。（書く）活動も停滞させないように、大いに若い人々に働きかけてもらいたいものである。」

「完結してから出したまえ。それとも、作者はこれで完結していると思っているのであろうか。」

「なんでもない日常茶飯事のなかから、ちょっとした話題をとらえてきて、一篇の読物にする才能は、マキさん抜群であるぞよ。それはたしかに、才能であるにちがいないが、才能にまかせて、安易にチョコチョコと文章を仕立て上げるのは、良い癖とはいえない。」

「面白いことは面白いが、相当独りよがりの文章で、作者が、ニヤニヤしながら書いている姿態がみえる。表現態度としてはあまり上等ではない。」

「粘り強く主題を追求したり、人物の内部にメスを向けて、人間をつかまえるためのエネルギーの消費を惜しんでいるとしか思えない。もっとも、その方が市民的安全は保証されるのだが、文学としては、低位から脱することはできないだろう。」

「牧さんの文章は手馴れて書いている。しかし、その手馴れた文章からは、いくらでもボ

口が出てくる。今日は、すこしボロをテキハツしてみた。手馴れたとみえる文章が、意外に拙いのである。一つの事象を書くにしても、どうも突っ込みが足りなく、細部がちっとも書けていないのである。もっと苦勞したまえ。」

提出した原稿がまっ赤に朱が入って、これだけ厳しく批評されるとまったくイヤになる。そんなこと、いわはってもこちらはプロじゃありません。これでもいっしょうけんめい作品にしたんです。思うようにいかなくて、自分ながら、はがゆい気持ちで書いているのです、などと思いながら、それでも下手な文章を真剣に見てもらったりして「下手なものは、なんぼ下手でもよい。まちがっていなければ」と言われた先生の言葉を思い出して、また原稿用紙に向かう。そして思うことは、仲間が増えればよいのに、である。

9. 鈴木さんの失敗

9. この作品も「オオ！ エルビス」と同じように、過去をヒントにして書いた作品である。舞台は職場のエピソードであり、懐かしい思いはあるが、作品として成功しているかどうかは疑わしい。

(©昭和 51 年 10 月 1 日 支部機関誌「はぐるま」13 号)

鈴木さんの退社は山崎から聞いた。

「会社の若い女の子に手を出したので首になったのだ。あんな真面目な人がどうしたのかな」と不思議そうな顔をする。

「真面目な人だからだろう。そうでなかったら、もうすこしうまくやるさ」とぼくは応えた。

「そうかな、会社を休んで女の子とどこかへ遊びに行ったっていうじゃないか。そんな人はどうしようもないよ。」山崎は、いよいよ真剣になって怒った。あまりにも山崎の表情が真剣だったので、ぼくは話題を転じた。

その時はそれで終わったのだが、ぼくの心の中には、すくなく動揺が残っているのだ。まず、鈴木さんという人が、ぼくの若き一時代の理想像であったことだ。鈴木さんの入社はぼくより後であったと思うが、ぼくが知った頃は、寮の役員かなにかをしていて実に颯爽として見えた。野球部のレギュラーであったし、文集には、いくつかの青春話を発表していたし、演劇部もやっていた。だいいち、口数がすくなくてやさしい心の持ち主であった。そのころの寮の平均像は、給料日ともなれば袋ごと持って街へ飛び出し、三日も過ぎればスッテンテンになり、何かと言えば喧嘩が始まる。理由もなく酔っ払いが箒（ほうき）を手にして、寮生を廊下に並ばせ、平手打ちをくらわせる、というようなことが起きる日常であった。暴力をもって対抗できないぼくたちは、いつもビクビクしていた。

そんなころ、〈あんな先輩になりたい〉沢山の先輩の生き方に接しながら、まぎれもなく鈴木さんを選んだことを記憶している。以来、組合や自治会を通して親交が続くことになる。接するほどに、鈴木さんの魅力がそのまま伝わってくる。とくに、社会や会社のいまのありかたというものに、不平不満でなく、堂々と批判を加えるというところが、仲間のなかになり新鮮さだと気づいたのは、ずっと後のことである。従ってぼくは、絶えず鈴木さんをマークしていたが、酒を一緒に飲みに行ったり、遊びに二人で出かけたような記憶はない。年齢も違ったが、そんなことをあまりしない人であった。鈴木さんは、現在の自分をとりまく社会や、会社を鋭く批判したが、それだけにまた、周囲の人々に優しく接し、自分の行動には厳しく純粋で、毎日毎日を問い直していくひたむきさを持っていた。組合の部会を開くとき、鈴木さんの準備は周到で、熱意があり、いつも部員がひっぱりこまれてしまうのだった。そんなときの鈴木さんは雄弁になった。後刻、同じような立場をぼくも経験することになり、

鈴木さんを真似ようとしても、及ぶべくもないことを思い知らされ、改めて鈴木さんを思ったのである。本当に生きている人だ、そういうイメージはいまも消えない。

私の職場に、西崎緑という台持長がいた。字のうまい人で、その書道は、なんどもコンクールを制した腕前だと聞いた。真っ白い肌と優しい声の持ち主であった。ぼくより一年上であったが、ぼくは、彼女と話すときいつも胸が騒いだ。

「きのうの日曜日なにをしていました？」などと声をかけられると、ぼくは、どう答えてよいか、わからなくなってしまうのだった。額に汗して台掃除に取り組む西崎の横顔は、天使にも似て、キラリと光る瞳の中には、ぼくなどとは、まったく別の世界が秘められているように感ぜられた。

やがて、街を歩く鈴木さんと西崎緑を見かけるようになった。もちろん、男ぼかったが、黒に白をあしらったワンピースの西崎緑はとても可愛い。世間並みに言えば、鈴木さんは大卒の職員であり、西崎緑は中卒の工員であった（その頃は、従業員をそんなふうに分けて呼んだものだ）。従って二人の交際は、世の常識に反するところがあり、ぼくは、そんな二人によけい快哉を叫ぶ気持ちがしたものだ。やがて、鈴木さんは他工場へ転勤する。この交際が原因であったかどうか、ぼくは知らない。それからの二人はどういう経過があったかどうか、ぼくは知らない。結果として二人は結婚に至らなかった。鈴木さんの選んだ相手は、ある資産家の一人娘であったという。このへんの事情も知らないから、以下はぼくの推測である。

鈴木さんは、世間、社会の言うことを聞かない人間であった。当然、会社の言うことも聞かない。従って、自分には厳しかったし、仕事も熱心であったが、いつも自分のペースがあった。生産工場は、利潤追求を第一としているから、すくなくとも今の社会、体制というものを肯定して考えることが前提となる。そのうえでどんな困難があっても仕事をやり遂げる鉄の意志が要求される。プロとしての責任を果たさぬ人間は、何も要求できないという倫理である。

鈴木さんは、そういう職場をとりまく常識に反旗をひるがえしていた。世に言う出世コースに乗れなかった原因もそんなところにあるだろう。そんな鈴木さんの創った自分の世界—実行の世界—それが恋愛ではなかったろうか。西崎緑、資産家の娘、職場の女性、鈴木さんは、その何れにも誠実でひたむきに接していたと想像できる。

しかし、皮肉なことにいずれの恋愛も長もちしない。元来、恋愛は瞬間の契約でしかないからである。従って、世の多くのテクニシャンは、ひとりの社会的に弱い女をかばってやるのだ。おれがというフェミニズムで、恋愛を、人生を終息させてしまうのだ。それが現実との妥協の産物であることは言うまでもない。

鈴木さんはそういった偽善に耐えられなかったのである。幸いといっていいのかどうか、鈴木さんには子供が無かった。より多くの困難に出逢おうとも、鈴木さんは、自分の真実を守ろうとしたのだ。

これがぼくの推測である。そしていま、鈴木さんの周辺にたちこめる煙は、単なる現実からの逃避という汚名である。

四十歳にしての恋愛、鈴木さんも対象を誤ったか、とぼくも思うが、もう耳を貸さないだろう。

おわりに

2012年は静かなお正月であった。まるであの3・11の震災に対する自然からのお詫

びではないのだろうか、とまで思わせる静けさであった。私にとっては、2002年の退職から十年、七十歳の節目である。

「職場文芸」は仕事を別にして、私の生活を支える大きな柱であった。中学校を卒業以来四十五年、紡績工場ひとすじの半生であった。しみじみ「書いたり、読んだりであった」と思うのである。

労働組合の機関紙・誌投稿、支部機関誌、社内報の通信員、なんでも手を出してきた。今回は、そういう私の十代から、勢いにまかせて書きなぐっていたころの文章を、押し入れから引っ張り出してきた。

「労働者の文章がこのような中学生レベルであってよいはずがない」

「藤牧君の生活綴方はしばしば小説になっている。それも下手な小説であるからやりきれない」

後刻、小川隆太郎先生からはよくこんな指摘を受けた。今回のものは、その前に位置する作文群ということになる。職場の働く青春のひとつとして、「わたしにもあったなあ」と読んで頂けるとうれしい。

本文でも書いたように、製造業の現場はすっかり変わってしまった。2004年、カネボウは債務超過から産業再生機構の適用を受け、繊維から撤退した。鈴鹿工場跡地はショッピングセンターとなり、きょうも多く買い物客でにぎわっている。適用を受けなかった他社といえどもまたその変化が著しい。

私はいま、夫婦二人の生活である。妻は1992年、たった一回の風邪薬の投与が原因となって、重度の薬疹を起こした。こちらも闘病二十年の節目である。視力低下は続いているが、どうやら家事一切に向かっている。愛着を持っている月下美人は昨年、三十個もの花を咲かせた。ささやかな喜びである。老境に充実あれ、と願う次第である。

終